

令和2年度厚生労働行政推進調査事業費補助金
(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)
分担研究報告書

民間支援団体における回復プログラムの開発研究

分担研究者：引土 絵未（国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部／
日本女子大学）

研究協力者：喜多村真紀（国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部／
国際医療福祉大学大学院）

新田慎一郎（国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部／
神奈川病院）

菊池美奈子（一橋大学大学院社会学研究科）

岡崎 重人（NPO 法人川崎ダルク支援会）

加藤 隆（NPO 法人八王子ダルク）

山本 大（NPO 法人アパリ藤岡ダルク）

山崎 明義（特定非営利活動法人東京ダルク）

【研究要旨】

【目的】本研究の目的は、民間支援団体ダルク等において新たに導入されつつある治療共同体エンカウンター・グループ（以下 EG）の有効性を明らかにすることにある。これまでの研究における課題として、対象者数が少ないこと、また、量的変数では測定できない EG の意義を明らかにすることが残されていた。そこで、本研究では、①継続的に蓄積されてきた EG 実施施設における質問紙調査の効果検証、②インタビュー調査についての質的分析を実施した。

【方法】①EG 実施施設における効果検証では、EG を実施する A ダルク（15 名）、B ダルク（22 名）、C ダルク（22 名）、D ダルク（7 名）の 66 名について、導入時、半年後（FU6 ヶ月）の 2 時点で自記式アンケート調査を実施した。アンケート項目では基本属性、利用期間、主たる使用薬物、教育歴、精神科通院の有無、精神的健康を自己実現の観点から測定することを目的とした SEAS2000、EG についての自己評価を用いた。②インタビュー調査による質的分析では、EG を実施する A・B・C ダルク 15 名を対象にインタビュー調査を実施し、質的データ分析ソフト MAXQDA を用いて分析を行なった。調査実施にあたっては、国立精神・神経医療研究センター倫理委員会の承認を得た（承認番号 A2018-069）。

【結果】①性別、年齢、利用期間、主たる使用薬物、教育歴、定期的な精神科通院の有無の基本属性およびベースライン時点での SEAS2000 得点について、4 施設間の有意差について確認したところ、利用期間、定期的な精神科通院の有無において有意差が認められたが、ベースライン時点での SEAS2000 得点に有意差が認められなかったため、4 施設を合算して分析を進めた。次に、ベースラインから FU6 ヶ月の自己実現尺度得点変化について Wilcoxon 符号付き順位検定にて確認した結果、総得点 ($p=0.001, r=0.40$) 及び下位尺度「ありのままの自己肯定」($p=0.009, r=0.32$)、「自己信頼」($p=0.014, r=0.30$) において有意に得点が上昇していた。続いて、SEAS2000 得点増減に関連する要因の検討を目的に、SEAS2000 得点変化について増加群 ($n=41$) と減少群 ($n=25$) に分類し、二項ロジスティック回帰分析を行なった。その結果、ベースライン時の SEAS2000 得

点 (0.792 : 0.661-0.948) のオッズ比が得点の減少に有意 ($p < 0.001$) に影響していた。

②インタビューデータについて質的分析を行った結果、585 のコードが抽出され、5 つのカテゴリ (EG における変化、EG の特徴、EG のツール、ファシリテーション、EG の課題) が生成された。そのうち、EG の効果に関連する 2 つのカテゴリ (EG における変化、EG の特徴) について考察を行なった。EG における変化では、「内的変化」、「行動の変化」、「グループの変化」が生成され、「内的変化」では、「課題に対する気づきが得られる」、「みんなに支えられて自分の感情が出せる」、「あたたかさ、愛情を感じる」などの 7 つのサブコードが生成された。「行動の変化」では、「人間関係の変化」、「コミュニケーションの変化」、「エンパワメント」の 3 つのサブコードが生成された。

【考察】①ベースラインから FU6 か月の SEAS2000 得点変化について有意に得点が上昇しており、これらの調査結果は、これまでの研究においても明らかにされてきたが、EG による精神的健康度の高まりが維持されていることが示唆された。また、自己実現尺度得点の増減に影響を与える要因として、元来精神的健康度が高い場合、EG 参加後の得点減少に影響を与えていることが示唆された。元来自己実現尺度得点の高さに影響する要因は、本調査からは明らかにならなかった。②EG の効果に関連する 2 つのカテゴリでは、EG における変化として、「課題に対する気づきが得られる」、「みんなに支えられて自分の感情が出せる」、「人間関係の変化」などが挙げられた。これらの変化の基盤となっているのが、EG の特徴として挙げられた「大切にしている理念」であり、言いっぱなし聞きっぱなし形式ではない「直接的なコミュニケーション」を安全に実施することを可能とし、「グループの力・相互作用」によりグループの効果を高めていると考えられた。

①②を通して、EG が精神的健康を高めること、その背景として直接的なコミュニケーションを通して課題に対する気づきが得られることや安全に感情に向き合うことができることなどが挙げられた。一方で、効果を抑制する要因として、参加時点から精神的健康度が高いことが挙げられたが、量的調査ではその背景は明らかにならなかった。その要因について質的分析結果から考察し、元来精神的健康が高い場合、話題提供者となる機会が乏しく、自己成長の部分を中心に測定する自己実現尺度では、グループの参加者として得られる他者との関係における変化が測定されないために、効果を抑制する結果が得られたことが推察される。また、話題提供を実施していたとしても、心理的安全を担保するための「深めない工夫」により、効果を抑制していることが推察された。今後も、「深めない工夫」を基盤としたグループ運営を前提とした上で、本調査では測定されていないと想定される、他者との関係という要因について、さらなる研究が求められる。本研究の限界として、調査対象者が男性に限定されており、女性に対する EG の効果については明らかになっていないことが挙げられる。今後は、女性を対象とした治療共同体プログラムや EG の導入方法やその効果について検討が必要となる。

A. 研究目的

刑の一部執行制度の施行により、受け入れ先の一つとしてその役割を期待されているのが、民間支援団体ダルクである。ダルクの成果についてはこれまでも挙げられているが、直近のダルク利用者の追っかけ調査の結果によれば、2 年半後の利用者 (確認の取れた退所者含む) の

完全断薬率は 65.4%¹⁾ とされ、非常に高い断薬率が示されている。しかし一方で、当事者コミュニティゆえの困難も指摘されている。利用者の多様化に伴い、ダルク終了後の社会復帰する場の不足やスタッフの確保、利用者の精神症状への対応など支援における課題^{2) 3)} も積み上げられている。

このようなダルクの抱える課題や困難に対

して当事者の経験的知識に依拠する伝統的な手法だけではなく、新たな選択肢を提供しようとする動きがある。ワークブックを用いた集団薬物再乱用防止プログラム SMARPP (Serigaya Methamphetamine Relapse Prevention Program)^{4) 5)}などの認知行動療法や当事者研究⁶⁾、そして、EGがその一つである。

治療共同体モデルの特徴は「手法としての共同体」⁷⁾であるとされ、「入所者自身が治療共同体における社会化と治療過程の変化のための媒介者となる」⁷⁾機能の重要性が挙げられる。その効果とともに世界各国で展開され、薬物依存症に対する代表的な中長期入所プログラムとして位置づけられることとなった⁸⁾。EGは、治療共同体モデルで実施されるグループワークの一つであり、治療共同体モデルの重要かつ基盤となる要素(共感と責任のある関係、現実と向き合う機会、絶対的な誠実さ、個人の変化に不可欠な自己覚知)によって構成されており、それゆえに、治療共同体モデルにおいて象徴的なグループとされている⁷⁾。

EGの特徴はメンバーシップフィードバックにあり、話題提供者に対し参加者全員で安全な質問とフィードバックによりサポートする。

報告者らは、2013年よりダルクでのEGの導入を開始し、2014年より治療共同体研究会を隔月開催し、EGの基礎的な知識・技術を提供するための講義や体験グループなどを実施してきた。また、EGの普及を目的に、研修やワークショップを開催している。

これらのEGの効果検証として、2013年よりAダルク、2014年よりBダルク、2015年よりCダルク、2019年よりDダルクにてEGを導入すると同時に、自己実現尺度SEAS2000⁹⁾を用いた自記式アンケート調査を実施してきた^{10) 11)}。その結果、EG参加から半年後の効果が認められた一方で、長期的な効果については明らかにならなかった。

また、2019年度よりEG準備期間にあるダルクを対照群として設定することを試み、性別、年齢、利用期間、主たる使用薬物、教育歴、定

期的な精神科通院の有無の基本属性について、傾向スコアによってマッチングし、二群間比較を実施した。

ベースラインからFU6ヶ月のSEAS2000得点変化について、対照群では大きな変化が見られないのに対し、介入群では有意に得点が上昇しており、また、FU6ヶ月時点の自己実現尺度得点について二群間比較を実施した結果、下位尺度「ありのままの自己肯定」において介入群が対照群に比較し有意に得点が高く、介入群では精神的健康度が高まっていることが示唆された。これは、EG自体の効果について支持する1つの結果であると考えられる。

これまでの研究の課題として、対象者数が少ないこと、また、量的変数では測定できないEGの意義を明らかにすることが残されていた。そこで、本研究では、①継続的に蓄積されてきた介入群の調査結果からの効果検証、②インタビュー調査についての質的分析を実施した。

B. 研究方法

1. 対象者

【研究1：EG実施施設における効果検証】

EGを実施するA・B・C・Dダルクにて定期的にEGに参加する利用者のうち調査の同意を得られた103名。そのうち、調査実施2時点でのデータのある66名を分析対象とした。調査期間は、EG開始時より2020年12月である。調査対象除外となった37名については、中途退所・施設移動・就労などのほかのプログラムへの移行、コロナ禍によるプログラムの中断などの理由が挙げられる。

【研究2：インタビュー調査による質的分析】

EGを実施するA・B・Cダルクにて定期的にEGに参加する利用者及びスタッフのうち、グループ参加期間が9ヶ月以上であり、調査の同意を得られた15名。調査実施期間は2018年11月～2019年3月である。

2. 調査方法

【研究1：EG実施施設における効果検証】

調査項目は、年齢、性別、利用期間、入所の契機となった主たる使用薬物、最終教育歴、精神科通院の有無、自己実現尺度 SEAS2000、グループの自己評価である。自己実現尺度 SEAS2000 は、精神的健康を自己実現の観点から測定することを目的とした POI (Personal Orientation Inventory) をもとに、心理学領域で広く展開されるエンカウンター・グループの効果測定尺度として開発された SEAS (Self-Actualization Scale) の改訂版である。SEAS2000 は4因子(「ありのままの自己肯定」「とらわれからの解放」「自己信頼」「率直さ」) 24項目で構成され、「はい」「どちらともいえない」「いいえ」の3件法となっている。

グループに対する自己評価として、介入群では EG、対照群ではダルクミーティングに対し7つの項目について、「全くそう思わない」から「全くそう思う」の5件法にて回答を得た。

Aダルク(2013年4月～)、Bダルク(2014年4月～)、Cダルク(2015年10月～)、Dダルク(2019年4月～)において週1回程度1時間半～2時間 EG を実施し、継続的に EG に参加する利用者・研修スタッフに対し、導入時・FU6 ヶ月の2時点において自記式アンケート調査を実施した。

【研究2：インタビュー調査による質的分析】

インタビュー項目は、基本属性、参加期間、EG とダルクミーティングの違い、EG 参加による個人・人間関係への影響、影響を受けた質問及びフィードバック、EG 参加における課題である。

3. 分析方法

【研究1：EG実施施設における効果検証】

まず、ベースラインの各調査対象施設の基本属性変数の記述統計を算出し、各施設間の基本属性についての有意差の有無を確認した。続いて、ベースラインから FU6 ヶ月時点の SEAS2000 の得点変化について、Wilcoxon 符号付き順位検定にて確認した。

次に、ベースラインから FU6 ヶ月の SEAS2000 得点変化について増加群 (n=41) と減少群 (n=25) に分類し、施設・教育歴・入所期間・主たる使用薬物・精神科通院の有無・ベースラインの SEAS2000 得点及び下位尺度・FU6 ヶ月のグループの自己評価を説明変数とし、SEAS2000 得点増加群・減少群を目的変数として、変数増加法・尤度比を用いた二項ロジスティック回帰分析を行なった。

なお、統計学的解析には SPSS for Windows version24 を使い、両側検定にて $P<0.05$ を有意水準とした。

【研究2：インタビュー調査による質的分析】

質的データ分析ソフト MAXQDA (Qualitative Data Analysis) を用いて分析を行なった。MAXQDA は、インタビューデータや新聞雑誌などの文字テキスト情報を文書型データベースとして体系的に整理し、分析するために開発されたコンピュータ・プログラムであり、「グラウンデッド・セオリー・アプローチ」の理論に基づいている⁵⁾。

分析手順は以下の通りである。ICレコーダーで録音した音声データから逐語録を作成し、逐語録を MAXQDA にインポートした。MAXQDA にインポートした逐語録について、意味内容ごとに切片化し、ラベルをつけるコード化を行なった。これらの個別のコードを重ね合わせ、類似点や相違点に注意しながら、カテゴリーにまとめた。

(倫理面への配慮)

【研究1：EG実施施設における効果検証】

調査票を配布し、臨床研究に関する倫理指針等に基づき、人権の擁護、インフォームド・コンセント、研究参加による個人への不利益がないことを書面にて説明し、同意を得られた参加者を対象者とした。

また、施設への EG 導入に際しては、ダルクがセルフヘルプコミュニティであるという特性を尊重し、研究を前提とした調査依頼を実施していない。施設から EG 導入希望があった場合にのみ、グループ導入および調査についての

説明を実施し、同意を得られた場合に調査を実施した。

【研究2：インタビュー調査による質的分析】

EGに参加する利用者に対し、調査の目的・個人の権利擁護および個人情報の保護に関して記載した研究説明書を用いて口頭で説明したうえで調査協力に同意した場合にのみ、あらかじめ設定したインタビューガイドを基本に半構造化面接を実施した。所要時間は1時間前後であった。

本研究は国立精神・神経医療研究センター倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号A2018-069）。

C. 研究結果

【研究1：EG実施施設における効果検証】

1. 対象施設の基本属性について

各対象施設の概要および基本属性を表1に示す。介入群66名では、性別は全員が男性、年齢の中央値（四分位）は36.5（30,43）歳であった。利用期間は1年以上3年未満及び3ヶ月未満が22名（33.3%）と最も多く、続いて、3ヶ月以上1年未満が13名（19.7%）、3年以上が9名（13.6%）であった。入所の契機となった主たる使用薬物は、覚せい剤が43名（65.2%）と最も多く、続いて危険ドラッグ7名（10.6%）、アルコール6名（9.1%）、大麻5名（7.6%）、鎮咳薬、処方薬を含むそのほか5名（7.6%）であった。教育歴については、高校卒業が25名（39.1%）と最も多く、続いて中学校卒業が21名（32.8%）、大学卒業13名（20.3%）、専門学校を含むその他5名（7.9%）、であった。定期的な精神科通院の有無については、42名65.6%が定期的に精神科通院をしていた。

続いて、各施設間の基本属性についての有意差を確認したところ、利用期間（ $p=0.028$ ）、定期的な通院（ $p=0.047$ ）において各施設間の有意差が認められたが、メインアウトカムである自己実現尺度（ベースライン時点）では有意差が認められなかったため、介入群4施設を合算して分析を進めた。

2. ベースラインからFU6ヶ月のSEAS2000得点変化

ベースラインからFU6ヶ月の自己実現尺度得点の変化についてWilcoxon符号付き順位検定にて確認した結果を表2に示す。

自己実現尺度得点中央値（四分位）、総得点において有意差が認められ、ベースライン22（17,26.25）点からFU6ヶ月26（20,28.25）点と得点が上昇していた（ $p=0.001$ ）。また下位尺度についても、「ありのままの自己肯定」ベースライン5（2,8）点からFU6ヶ月6（4,8）点（ $p=0.009$ ）、「自己信頼」ベースライン5（4,7）点からFU6ヶ月6（4,7）点（ $p=0.014$ ）へと得点が上昇していた。

3. SEAS2000得点増減に関連する要因の検討

ベースラインからFU6ヶ月のSEAS2000得点変化について増加群（ $n=41$ ）と減少群（ $n=25$ ）に分類し、実施施設・教育歴・入所期間・主たる使用薬物・精神科通院の有無・ベースラインのSEAS2000得点及び下位尺度・FU6ヶ月のグループの自己評価を説明変数とし、SEAS2000得点増加群・減少群を目的変数として、変数増加法・尤度比を用いた二項ロジスティック回帰分析を行なった。その結果、最終的に採用された回帰式とその変数は表3となった。モデル係数のオムニバス検定は有意（ $p<0.001$ ）であり、回帰式の有意性が保証される結果が得られた。Hosmer-Lemeshowの検定の結果は、有意確率が0.45であり、モデルの適合度も保証された。なお、判別の中率は71.2%であった。

ベースライン時のSEAS2000得点（0.768：0.665-0.886）のオッズ比が得点の減少に有意（ $p<0.001$ ）に影響していた。ベースライン時のSEAS2000得点の高さに影響を与える要因について、ベースライン時のSEAS2000得点の平均値を算出し、平均値以上群（ $n=29$ ）と平均値以下群（ $n=37$ ）の二群に分類し、変数増加法・尤度比を用いた二項ロジスティック回帰分析を行なったが、有意差は認められなかった。

【研究2：インタビュー調査による質的分析】

MAXQDA にインポートした逐語録について、意味内容ごとに切片化し、ラベルをつけるコード化を行なった結果、585 のコードが抽出された。これらの個別のコードを重ね合わせ、類似点や相違点に注意しながら、カテゴリーにまとめた結果、5 つのカテゴリー（EG における変化、EG の特徴、EG のツール、ファシリテーション、EG の課題）と 25 のコード（大切にしている理念、プログラムにおける EG の意味、メンバー構成による影響、直接的なコミュニケーション、日常生活に必要な道具、グループの力・相互作用、質問、フィードバック、トピック、内的変化、行動の変化、グループの変化、安全を守る、場の空気を作る、グループに委ねる、グループの方向性を示す、中立的な立場、関係性による影響、フィードバックの課題、感情的な影響、質問の課題、マナー化、アノニミティの課題、表面的なグループ、抵抗感）が生成された（表 4）。以下では、EG の効果に関連する 2 つのカテゴリー（EG における変化、EG の特徴）についてその概要を述べる。

なお、コードは「」内に、語りを「」内に表記する。また、調査対象者（表 5）を（）内に表記する。

1. EG における変化

EG における変化では、「内的変化」、「行動の変化」、「グループの変化」が生成された。

「内的変化」では、「課題に対する気づきが得られる」、「みんなに支えられて自分の感情が出せる」、「あたたかさ、愛情を感じる」、「普段聞けない本音のやりとりができる」、「心を開くことができる」、「ありのままを受け入れる」、「問題が何も解決されなくても「出してよかった」と思える」の 7 つのサブコードが生成された。

「課題に対する気づきが得られる」（1, 2, 3, 4, 5, 6, 8, 9, 11, 12, 13, 14）では、「自分がこうだになってある程度予想を立てていることもあるんですね、その問題に対して。でも、それとは違う意見も出てきたときに気付かせてもらってことは

多々ありました。こういう考えもあるんだ、持ってるんだっていうね。新しい発見を与えてくれた仲間も結構多い」（6）と問題に対して多様な視点をもたらすことにより気づきがえられることが挙げられた。「みんなに支えられて自分の感情が出せる」（3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 12, 14）では、「ずっと一緒に屋根の下で暮らしててもそこまで心を開いたことはなかったし、何より人前で鎧をまとってる彼が、僕だけじゃなくて周りに絶対泣くもんかって、こいつの前では泣くかって人がいるような所でも人目をはばからず泣いてる姿を見て、これは多分エンカウンターの効果なんだなと思いました」（4）と、日常生活では感情表出をしない人が EG を通して感情を露わにすることができたことについて挙げられた。「あたたかさ、愛情を感じる」（1, 2, 3, 4, 6, 7, 9, 10, 12）「周りも温かくやれたグループの後は心が楽になる」（3）「赤の他人だけど愛情が伝わってくる。質問だったり、フィードバックの中にはやっぱり、トピック者に対しても愛情があったり、あと、周りのみんなにも愛情があったり」（9）と EG を通して愛情や温かさなど肯定的な情緒的交流があることが挙げられた。「普段聞けない本音のやりとりができる」（3, 4, 5, 7, 10, 14, 15）では、「やっぱお互い普段聞けない本音が聞けて、相手のこと知れてお互い安心したりする」（3）、「エンカウンターの場合は、割と人間関係の問題とか、普通のミーティングだったら話をしてはいけない、触れてはいけないところに関して、エンカウンターの場合は別に話をしても構わないんで、通常のミーティングと違って突っ込んだ話ができる」（15）と通常のプログラムではなかなか触れることのできないテーマに取り組むことができることが挙げられた。

「行動の変化」では、「人間関係の変化」、「コミュニケーションの変化」、「エンパワメント」の 3 つのサブコードが生成された。

「人間関係の変化」（1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15）は調査対象者の大部分が挙げており、「人間関係は円満になる。結構人が、人を否定しないから」（1）、「エンカウンター受けたことで、親密にもなれる仲間が増えたりとか、今まで話し

たことない仲間と話すことも、数は少ないかもしれないけど、あったとは思いますが」(11)と、その影響の大小は様々だが、人間関係に影響があったことが挙げられた。「コミュニケーションの変化」(1, 2, 7, 8, 9, 11, 13)では、「自分の質問の出し方とか、フィードバックの仕方っていうことが、日常生活のコミュニケーション、人との関わり方でも通じる場所があって、そういうコミュニケーションの練習に役立てるために、エンカウンターってものを使っていったらいい。そういう気付きとか学びっていうのは、あったと思います」(11)とEGがコミュニケーションの練習の場になっていたこと、また、「仲間に対して、思いやりが深まったような感じはしますね」(9)とEGを通して仲間との関わり方が変化したことが挙げられた。「エンパワメント」(5, 7, 13)では、「その人が、ちょっと腐ってた部分、やってらんねえとか、面倒くせえなっていうことをトピックに出す。そこでこう、どんだんいいこと言ったら、自分にもいいところこんなにいっぱいあるんだって、こんなふうに見てくれてるんだ俺のことを、って思ったら、多分、モチベーション上がると思うから。それでモチベーションが上がってちょっとでも変われば、その積み重ねだと思うから」(5)とEGを通したモチベーションを上げていく関わりについて挙げられた。

「グループの変化」では、「一人のメンバーが何日も帰ってこなくて、そういうのがすごく続いて、その人のエンカウンターをやったんですよ。「おまえ、そんないつまでやってんだ」っていう雰囲気になっちゃうのかなって思って、すごく怖かったんだけど。その人のことを、普段は「またあいつ帰ってこないよ」って言ってる人たちが、「あんなのいつまで置いておくんですか？」って言ってた人たちが、なんか途中から、すごくその人を心配しているようなね。みんながそういう風に、時間の中で変わっていったっていうのにちょっと驚いた」(14)とグループ全体の変化について挙げられた。

2. EGの特徴

EGの特徴では、「大切にしている理念」、「プ

ログラムにおけるEGの意味」、「直接的なコミュニケーション」、「日常生活に必要な道具」、「グループの力・相互作用」が生成された。

「大切にしている理念」(1, 5, 7, 8, 9, 11, 12, 13)では、「人がどうかじゃなくて自分がその時間をどのように利用するのか」(8)と主体的に取り組むこと、「落としどころに誘導するような質問というのはやめるようにはしてます」(7)と落とし所に誘導しないことなどが挙げられた。

「プログラムにおけるEGの意味」(5, 8, 11, 13, 14)では、「言いつばなしの聞きつばなし」は確かに、中心的なプログラムってのはもちろん変わりはないと思うんだけど、ダルクにいるときは(EGと)両輪でいいのかなって」(14)とEGの位置付けについて挙げられた。

「直接的なコミュニケーション」(2, 6, 7, 10, 13, 15)では、「エンカウンターは、自分の問題に対しても話ができるかもしれないけど、相手の問題に対しても、自分の意見を言えるっていう、ダルク(ミーティング)は一方通行の矢印だけど、エンカウンターは双方向」(13)とグループの中での双方向のコミュニケーションが特徴であることが挙げられた。

「日常生活に必要な道具」(1, 3, 4, 8, 9, 11, 13, 14)では、「私にとって、幸せに、みんなと一緒に暮らしていける道具だと思います。必要ですね。」(9)、と日常的な共同生活やプログラムの中で必要とツールであることが挙げられた。

「グループの力・相互作用」(5, 8, 13, 14)では、「よくいうグループの力ってのがたぶんそこなんだろうな。みんながトピック出してる人をサポートしてくれるっていう、その力。その相互作用なのかな」(14)とEGのグループとしての相互作用について挙げられた。

D. 考察

本研究では、民間支援団体ダルク等において新たに導入されつつあるEGの有効性を明らかにすることを目的に、①継続的に蓄積されてきたEG実施施設における質問紙調査の効果検証、②インタビュー調査についての質的分析を実

施した。以下に其々の考察を述べる。

【研究1：EG 実施施設における効果検証】

自己実現尺度について、ベースラインからFU6 か月の総得点において有意に得点が上昇し、下位尺度「ありのままの自己肯定」、「自己信頼」においても有意に得点が上昇していた。以上の調査結果は、これまでの研究¹¹⁾においても明らかにされてきたが、対象者数が少ないという残された課題への応答として調査を継続実施し、EG による精神的健康度の高まりが維持されていることが示唆された。

また、自己実現尺度得点の増減に影響を与える要因の検討として、自己実現尺度得点について増加群と減少群と分類し二項ロジスティック回帰分析を行なった。自己実現尺度得点の増減において、実施施設・教育歴・入所期間・主たる使用薬物・精神科通院の有無・FU6 ヶ月時点でのグループに対する自己評価による影響は認められず、元来自己実現尺度得点が高い、つまり、精神的健康度が高い場合、EG 参加後の得点減少に影響を与えていることが示唆された。元来自己実現尺度得点の高さに影響する要因は、本調査からは明らかにならなかったが、就労状況や家族構成などの社会的要因も含め今後更なる調査が必要とされる。

以上の調査結果の限界として、本研究の調査対象者は男性に限定されており、女性に対するEG の効果については明らかになっていないことが挙げられる。日本国内の治療共同体モデルにおける効果としては、刑務所内治療共同の効果測定として再入所率の低下が明らかになっている¹²⁾が、調査対象者は本調査同様に男性に限定されている。女性を対象とした治療共同体の効果測定として、米国の刑務所において治療共同体プログラムと認知行動療法の RCT の結果、治療共同体プログラムは、出所後1年時点の薬物使用および犯罪行動の減少、刑務所への再入所までの期間の増加などの効果が挙げられている¹³⁾。一方で、日本国内では、女性を対象とした治療共同体プログラムやEG の実践例も限られており、効果測定は実施されていない

現状にある。今後は、女性を対象とした治療共同体プログラムやEG の導入方法やその効果について検討が必要となる。

【研究2：インタビュー調査による質的分析】

EG における変化のうち最も多く挙げられた「内的変化」は「課題に対する気づきが得られる」ことであった。自身では気づくことができなかった課題に対する新しい見方や自分自身がどのように見えるのかということを通じて、課題を整理していくことができることが挙げられた。

また、このような気づきの前提となっているのが、「みんなに支えられて自分の感情が出せる」環境である。EG では「物事の解決ではなく物事を取り巻く感情の解決」を指標として、エモーショナル・リテラシー¹⁴⁾の獲得を目指している。エモーショナル・リテラシーとは感情における知性、心のある知性とも言われ、自身の感情を理解し、適切な形で表現できる力とされる。アディクションなどの問題の背景には感情の問題が影響しており、アディクションなどの問題のない新しい生き方へ移行していくには、アディクションに拠らない感情への対処方法を習得する必要があるとの考えに基づいている。EG は安全に感情に向きあうツールとして活用されていることが示唆された。

感情表出には安全性が前提となるが、EG の安全性を担保する一つの側面が「あたたかさ、愛情を感じる」土壌である。共同体における友人関係は、特別な愛着・絆であり、肯定的な絆は共同体全体への所属を促していくとされるが⁷⁾、EG では特に肯定的なコミュニケーションで終結することが重視されている。一方で、「みんな温かく良いこと言ってるけど、お前らホントか? って思う」(10) という意見もあるように、肯定的なコミュニケーションでの終結に対する違和感や抵抗感も挙げられている。安全性を担保した上で、参加者の意見や立場の多様性を意識した取り組みが今後必要となると考える。

続いて、「行動の変化」のうち大部分の参加者から挙げられたのが「人間関係の変化」であっ

た。治療共同体モデルでは、アディクションや孤立などのない仲間文化の価値や対人技術を伝えるために関係性が用いられ、その中で生じる関係性の問題は個人的な成長や回復を促すために活用される⁷⁾。仲間文化はセルフヘルプコミュニティ特有の価値であるが、個人的な回復のために意図的に関係性が用いられている点がEGの特徴であると言える。一方で、「*自分自身の人間関係はそんなに変わらないです*」(10)との意見もあるようにその影響の大小は様々である。

これらの変化の基盤となっているのが、EGの特徴である、「大切にしている理念」、「直接的なコミュニケーション」、「グループの力・相互作用」である。プログラム哲学は、すべてのTCの基本的な文化的要素であり、回復や正しい生活に導くためのコンセプトや信念、価値、規律が治療共同体の独自の用語によって表現されているが⁷⁾、EGでも同様に独自の理念が共有されていることが伺えた。「主体的に取り組むこと」や「落とし所に誘導しない」、「グループの声として受け取る」ことが理念として共有されることで、グループの回復の方向性が明示化されていると考えられる。このような理念を前提とし、言いつばなし聞きつばなし形式ではない「直接的なコミュニケーション」を安全に実施することを可能とし、「グループの力・相互作用」によりグループの効果を高めていると考えられる。

以上、インタビュー調査の質的分析のうち、EGの効果に関連する2つのカテゴリーについて考察した。これらの効果の前提である、EGの手法に関連するカテゴリーや課題については紙幅の都合により述べることができていない。今後はこれらの手法や課題についてさらに考察を進めていきたい。

【総合考察】

質問紙調査およびインタビュー調査を通して、EGが精神的健康を高めること、その背景として直接的なコミュニケーションを通して課題に対する気づきを得られることや安全に感

情に向き合うことができることなどが挙げられた。一方で、効果を抑制する要因として、参加時点から精神的健康度が高いことが挙げられたが、量的調査ではその背景は明らかになっていない。この点について、質的分析結果で挙げられた「課題に対する気づきを得られる」ことによる内的変化という側面から考察したい。

EGは話題提供者が提供するトピックを中心に、質問やフィードバックが行われ、話題提供者は課題に対する気づきを得ることができる。

「ミーティングも聞いてる人たちも気付いたりとかもちろんあると思うんですけど、エンカウンターのほうがより直接的にトピックを出す人以外、周りの人たちにも効果がある、いい意味であるような気がしてます」(4)と挙げられたように、参加者それぞれの気づきを得られることもEGの特徴の一つではあるが、グループの中心は話題提供者であり、話題提供者が最もグループの恩恵を受けると言っても過言ではない。そのため、毎回異なる話題提供者となるように、ファシリテーターが配慮をするが、参加時点より精神的健康が高いメンバーは、明確な課題が顕在化しにくく、話題提供者とならないまま入所期間が経過していくことが推察される。本調査のメインアウトカム尺度として使用しているSEAS2000開発者の坂中によると、SEAS2000は自己実現概念のうち特に自己成長の部分を中心に測定しており、例えば他者受容といった他者との関係の持ち方といった部分は測定されていないとする¹⁵⁾。そのため、話題提供者として得られることが想定される「課題に対する気づきを得られる」、「みんなに支えられて自分の感情が出せる」などの内的変化は得られにくく、参加者としても得られることが想定される「人間関係の変化」や「コミュニケーションの変化」などの「行動の変化」及び「グループの変化」についてはSEAS2000では測定されにくいことが推察される。

続いて、精神的健康の高いメンバーが話題提供をしていたと想定した場合についても考察したい。坂中はグループの心理的安全のためにファシリテーターが「深めない工夫」をするこ

とを挙げている¹⁵⁾。「深めない工夫」とは、状況に応じて「ふれあいと自己発見を促進しない工夫」であり、「日常会話よりもほんの少し深いくらいのレベル自己開示を広く積み重ねてゆく」こと、時間をゆったりとったり、メンバーの疲労やグループの雰囲気に応じた配慮をしたり、特定の方向に深めないことなどとされる。このような深めない工夫は心理的安全を保障し、参加者の満足度を高める一方で、自己実現得点の効果を抑制する側面が指摘されている。

EGでは、「落とし所に誘導しない」ことや、「引き出し過ぎちゃうと、フィードバックにならなくなっちゃうかなと思う。あのときのこと思い出して余計つらくなったとか、なんでそんな質問するんだとか、安全な場所じゃないんじゃないのかとか、そういうふうにはさせたくないじゃないですか、そういう場所じゃないから。そういうところも気を付けてる」(9)と、「深めない工夫」がファシリテーターだけでなく、メンバーの中でも共有されている。そのため、元来精神的健康が高く、課題が顕在化していないメンバーに対しては、「深めない工夫」という配慮が行われ、その結果、効果を抑制することが推察される。

週1回という頻度で実施されるEGにおいて心理的安全が担保されていることは非常に重要な要素であり、「深めない工夫」はEG実施においては必要不可欠と考える。今後も、「深めない工夫」を基盤としたグループ運営を前提とした上で、本調査では測定されていない、他者との関係という要因について、さらなる研究が求められる。

本研究の限界として、調査対象者が男性に限定されており、女性に対するEGの効果については明らかになっていないことが挙げられる。女性を対象とした治療共同体の効果測定として、米国の刑務所において治療共同体プログラムは、出所後1年時点の薬物使用および犯罪行動の減少、刑務所への再入所までの期間の増加などの効果が挙げられている¹³⁾。一方で、日本国内では、女性を対象とした治療共同体プログ

ラムの実践例も限られており、効果測定は実施されていない現状にある。今後は、女性を対象とした治療共同体プログラムやEGの導入方法やその効果について検討が必要となる。

E. 結論

本研究では、民間支援団体ダルクにおける回復プログラムとして新たに導入されつつあるEGに着目し、①継続的に蓄積されてきたEG実施施設における質問紙調査の効果検証、②インタビュー調査についての質的分析を実施した。

①EG実施施設における効果検証では、EGを実施するダルク4施設において質問紙調査を実施し、EG導入時点からFU6か月の自己実現得点総得点及び下位尺度「ありのままの自己肯定」、「自己信頼」において有意に得点が上昇しており、EGによる精神的健康度の高まりが維持されていることが示唆された。また、自己実現尺度得点の増減に影響を与える要因の検討として、二項ロジスティック回帰分析を行なった結果、元来自己実現尺度得点(精神的健康度)が高い場合、EG参加後の得点減少に影響を与えていることが示唆された。これらの要因は、本調査からは明らかにならなかった。

②インタビュー調査による質的分析では、EGを実施するダルク3施設にてインタビュー調査を実施し、質的分析を行なった。EGの効果に関連する2つのカテゴリー(EGにおける変化、EGの特徴)について考察した結果、EGにおける変化として、「課題に対する気づきを得られる」、「みんなに支えられて自分の感情が出せる」、「人間関係の変化」などが挙げられた。これらの変化の基盤となっているのが、EGの特徴として挙げられた「大切にしている理念」であり、言いっぱなし聞きっぱなし形式ではない「直接的なコミュニケーション」を安全に実施することを可能とし、「グループの力・相互作用」によりグループの効果を高めていると考えられた。

①②を通して、EGが精神的健康を高めるこ

と、その背景として直接的なコミュニケーションを通して課題に対する気づきを得られることや安全に感情に向き合うことができることなどが挙げられた。一方で、効果を抑制する要因として、参加時点から精神的健康度が高いことが挙げられたが、量的調査ではその背景は明らかにならなかった。その要因について質的分析結果から考察し、元来精神的健康が高い場合、話題提供者となる機会が乏しく、自己成長の部分を中心に測定する自己実現尺度では、グループの参加者として得られる他者との関係における変化が測定されないために、効果を抑制する結果が得られたことが推察される。また、話題提供を実施していたとしても、心理的安全を担保するための「深めない工夫」により、効果を抑制していることが推察された。今後も、「深めない工夫」を基盤としたグループ運営を前提とした上で、本調査では測定されていないと想定される、他者との関係という要因について、さらなる研究が求められる。

本研究の限界として、調査対象者が男性に限定されており、女性に対するEGの効果については明らかになっていないことが挙げられる。今後は、女性を対象とした治療共同体プログラムやEGの導入方法やその効果について検討が必要となる。

F. 参考文献

- 1) 嶋根卓也,高岸百合子,喜多村真紀,猪浦智史,引土絵未,山田理沙,近藤あゆみ,米澤雅子,近藤恒夫:民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究.厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業)再販防止推進計画における薬物依存症者の地域支援を推進するための政策.令和元年度分担研究報告書,2019.
- 2) 嶋根卓也,森田展彰,末次幸子,岡坂昌子:薬物依存症者による自助グループのニーズは満たされているか—全国ダルク調査から—.日本アルコール・薬物医学会雑誌 41, 100-107, 2006.
- 3) 特定非営利活動法人東京ダルク平成 21 年度社会福祉推進費補助金事業実施報告書依存症回復途上者の社会復帰に向けての就労・就学支援事業.2010.
- 4) 小林桜児,松本俊彦,大槻正樹,遠藤桂子,奥平謙一,原井宏明,和田清:覚せい剤依存症患者に対する外来再発予防プログラムの開発—Serigaya Methamphetamine Relapse Prevention Program (SMARPP) —.日本アルコール・薬物医学会雑誌, 4, 507-521, 2007.
- 5) 松本俊彦:薬物依存症に対する新たな治療プログラム「SMARPP」司法・医療・地域における継続した支援体制の構築を目指して.精神医学, 54, 1103-1110, 2012.
- 6) 上岡陽江:女性薬物依存症者の当事者研究.臨床心理学増刊第9号みんなの当事者研究, 109-114, 2017.
- 7) De Leon, George.: The therapeutic community: theory,model,and method. Springer,2000.
- 8) NIDA: Therapeutic communities. NIDA Research Report Series, 15-4877,2015.
- 9) 坂中正義:改訂版自己実現スケール(SEAS2000)作成の試み.福岡教育大学紀要, 52, 181-188, 2003.
- 10) 引土絵未,岡崎 重人,山崎明義,松本俊彦:日本型治療共同体モデルの試行と効果について.日本アルコール・薬物医学会雑誌, 50, 206-221, 2014.
- 11) 引土絵未,岡崎重人,加藤隆,山本大,山崎明義,松本俊彦:治療共同体エンカウンター・グループの効果とその要因について:日本アルコール・薬物医学会雑誌, 53 (2), 83-94, 2018.
- 12) 毛利真弓・藤岡淳子:刑務所内治療共同体の最入所低下効果—傾向スコアによる交絡調整を用いた検証.犯罪心理学研究,56 (1),29-46,2018.
- 13) Sacks, JoAnn., McKendrick, Karen., Hamilton, Zachary.: A randomized clinical trial of a therapeutic community

treatment for female inmates: outcomes at 6 and 12 months after prison release. *Journal of Addiction Diseases*, 31 (3), 258-269, 2012.

14) Steiner, Claude.: *Emotional Literacy Intelligence With a Heart. Personhood Pr.*2003.

15) 坂中正義：構成的エンカウンター・グループにおける心理的安全性を重視したファシリテーション - 「深めない工夫」と「プロセス的視点」 - .*教育実践研究* 13,111-120,2005.

G. 研究発表

1. 論文発表

- 1) 引土絵未：自助グループと治療共同体による回復.藤岡淳子編著,司法・犯罪心理学. 有斐閣ブックス,246-256,2020.
- 2) 引土絵未：依存症をとりまく秘密と嘘をめぐって. *こころの科学*,213,52-56,2020.

2. 学会発表

1) 引土絵未,小高真美：薬物依存症者の就労支援について 民間依存症回復支援施設に対するインタビュー調査.日本社会福祉学会第 68 回秋季大会 (2020 年度) ,E ポスター発表,2020.9.12.

2) 引土絵未,嶋根卓也,小高真美,秋元恵一郎,加藤隆,栗栖次郎,栗坪千明,山村 りつ,吉野美樹,松本俊彦：薬物依存症者の就労に関する研究：特例子会社を対象とした依存症者の就労に関する意識調査. 2020 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, WEB 開催, 2020.11.22.

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

- 1.特許取得
なし
- 2.実用新案登録
なし
3. その他
なし

表1 各施設における基本属性

介入群		A (n=15)	B (n=22)	C (n=22)	D (n=7)	全体 (n=66)	
中央値 (四分位数)							p
年齢		37 (25,44)	35.5 (31,41.25)	33.5 (30,41)	44 (32,55)	36.5 (30,43)	0.312
自己実現尺度		23 (19,26)	21 (16,28)	22.5 (16.75,30.5)	20 (17,26)	22 (17,26.25)	0.729
n (%)							
性別	男性	15 (100)	22 (100)	22 (100)	7 (100)	66 (100)	-
利用期間	3ヶ月未満	7 (46.7)	12 (54.5)	1 (4.5)	2 (28.6)	22 (33.3)	0.028*
	3ヶ月～ 1年	4 (26.7)	3 (13.6)	4 (18.2)	2 (28.6)	13 (19.7)	
	1～3年	3 (20)	4 (18.2)	12 (54.5)	3 (42.9)	22 (33.3)	
	3年以上	1 (6.7)	3 (13.6)	5 (22.7)	0 (0)	9 (13.6)	
主たる対象薬物	覚せい剤	12 (80.0)	10 (45.5)	16 (72.7)	5 (71.4)	43 (65.2)	0.363
	危険ドラッグ	1 (6.7)	3 (13.6)	3 (13.6)	0 (0)	7 (10.6)	
	アルコール	1 (6.7)	5 (22.7)	0 (0)	0 (0)	6 (9.1)	
	大麻	1 (6.7)	2 (9.1)	1 (4.5)	1 (14.3)	5 (7.6)	
	その他	0 (0)	2 (9.1)	2 (9.1)	1 (14.3)	5 (7.6)	
教育歴	中学校卒業	6 (40)	9 (42.9)	2 (9.5)	4 (57.1)	21 (32.8)	0.092
	高校卒業	8 (53.3)	8 (38.1)	7 (33.3)	2 (28.6)	25 (39.1)	
	専門学校 卒業	0 (0)	0 (0)	1 (4.8)	0 (0)	1 (1.6)	
	大学卒業	1 (6.7)	2 (9.5)	9 (42.9)	1 (14.3)	13 (20.3)	
	その他	0 (0)	2 (9.5)	2 (9.5)	0 (0)	4 (6.3)	
精神科	有	9 (60)	16 (76.2)	10 (47.6)	7 (100)	42 (65.6)	0.047*
	無	6 (40)	5 (23.8)	11 (52.4)	0 (0)	22 (34.4)	

Pearson カイ二乗検定, Kruskal-Wallis 検定

* p<0.05

表2 ベースラインからFU6ヶ月の自己実現尺度得点変化

(n=66)					
	ベースライン	FU6ヶ月			
	中央値 (四分位数)		z	r	p
自己実現尺度総得点	22 (17,26.25)	26 (20,28.25)	-3.234	0.40 中	0.001**
ありのままの自己肯定	5 (2,8)	6 (4,8)	-2.621	0.32 中	0.009**
とらわれからの解放	5 (3,6.25)	6 (4,7)	-1.767	0.22 小	0.077
自己信頼	5 (4,7)	6 (4,7)	-2.464	0.30 中	0.014*
率直さ	7 (5.75,8)	7 (5,9)	-1.255	0.15 小	0.209

Wilcoxon 符号付き順位検定

** p<0.01 * p<0.05

表3 二項ロジスティック回帰分析結果

	偏回帰係数	オッズ比	95%信頼区間 下限-上限	p
SEAS2000 ベースライン 総得点	-0.264	0.768	0.665-0.886	0.000***

***p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

表4 質的分析カテゴリー一覧

カテゴリー	コード	コード数
EGにおける変化	内的変化	129
	行動の変化	55
	グループの変化	13
EGの特徴	大切にしている理念	25
	プログラムにおけるEGの意味	23
	直接的なコミュニケーション	13
	日常生活に必要な道具	11
	グループの力、相互作用	9
EGのツール	質問	43
	フィードバック	42
	トピック	28
ファシリテーション	安全を守る	21
	場の空気を作る	16
	グループに委ねる	9
	グループの方向性を示す	9
	中立的な立場	8
EGの課題	関係性による影響	29
	フィードバックの課題	20
	感情的な影響	20
	メンバー構成による影響	15
	質問の課題	12
	マンネリ化	11
	アノニミティの課題	9
	表面的なグループ	6
	抵抗感	5

表5 インタビュー調査対象者一覧

	年齢	性別	施設	入所の契機となった 主たる使用薬物
1	33	男性	C	覚せい剤
2	34	男性	A	大麻
3	34	男性	B	鎮咳薬
4	38	男性	B	覚せい剤
5	44	男性	B	覚せい剤
6	44	男性	A	覚せい剤
7	45	男性	C	覚せい剤
8	46	男性	B	鎮咳薬
9	47	男性	B	覚せい剤
10	48	男性	B	覚せい剤
11	48	男性	C	覚せい剤
12	49	男性	A	覚せい剤
13	49	男性	C	危険ドラッグ
14	51	男性	B	覚せい剤
15	51	男性	C	覚せい剤